



桂林の街は狭くて、まわりの山々に押し潰されそうに見える。

河は幅広くゆったりと流れていて、

あたかも大地も天とともにそこに浮かぶかのようだ。

東南の方は遙か蛮夷の住む未開の地に通じ、

西北には高楼が築かれている。

神は青楓の岸のたもとに祀られ、

龍は白石の池に移り住んできた。

この異郷の民は一体何を禱るのだろうか。

あちこちからひっきりなしに簫や太鼓の音が響いてくる。

《城》 城壁に囲まれた街。

《地共浮》 土地が天と共に水に浮かんでいるように見える。

《絶域》 未開の地域。

《神青楓》 不思議な楓の老木。川岸に茂る楓の老木はみな樹皮に瘤があり、神通力を持つ

かに見えたという、晋時代の故事を典故としている。

《白石湫》 湫は池。桂林府城の北七十里にある白石湫に龍が住むという伝説があった。

《殊郷》 異民族の住む地域。

李商隱（八一〜八五七）は幼くして父を亡し、天平軍節度使令狐楚に才能を見出されて庇護をうけ二十五歳で進士となりました。しかし進士及第後まもなく令狐楚がなくなり、令狐楚の息子に排斥されま

す。当時、朝廷では、「牛李之党」と呼ばれる対立抗争の最中でしたが、令狐楚（牛の一派）の知遇を得ながら、政敵だった王茂元（李の一派）の娘と結婚したためでした。政争に巻き込まれたことも災いし官吏としてはあまり栄達せず不遇な生涯を送りました。

李商隱は三十六歳のときに、桂林觀察使鄭亞の書記として桂林に赴任します。この詩はその時に初めて見た桂州城の印象を歌った詩です。

桂林の山水は中唐以降詩跡化し、南宋時代には天下の名勝として有名になります。詩跡というのは、日本でいう「歌枕」に相当し、詩に詠まれて有名になり、ある特定のイメージを備えることになった場所をいいます。しかし桂林は多くの文人たちが左遷された土地でもあり、当時李商隱にとっては異民族の住む辺境の地という印象が強く、詩跡を尋ねるといふ物見遊山の気分には程遠かったです。

翌年、鄭亞は桂林から更に南の広東省恵陽県に左遷され、李商隱はひとり職を辞して都へと向かいます。その帰途、荊門を過ぎる長江で李商隱が乗った小舟が危うく転覆しそうになり、生きた心地がしなかつたと「荊門西より下る」という詩で述懐しています。

漂泊の詩人といえは李白と杜甫を連想しますが、当時の旅は今と違って命がけです。知識人だった多くの詩人は地位の高低こそあれ、否応なしに官吏として各処を転々としながら作詩しました。たとえ職を辞して旅を続けていたとしても、それは生活のため生きるための旅で、そこで詠まれた詩は、社会批評、政治評論として機能していました。

庭前緑荷葉 香氣酒よりも濃し
疎雨^そ忽^{たち}ち飛来すれば^て的^た的^たとして^め明珠^{いしゆ}走る



《大意》庭先にみずみずしい蓮の葉、漂う香りは馥郁として酒より芳しい。まばらな雨がにわかざーっと本降りになると、真珠の玉となってきらきら輝きながら葉の上をころがりめぐる。(劉基詩・小畫に題す)

夏木自ら新色 泉聲旧時の如し



《大意》夏木立はみずみずしい色を呈し、泉のせせらぎは昔変わらず涼しく聞こえる。

清虚を守る



《大意》潔白でわだかまりのない生活を保ち守る。(漢書)

読み
松聲古今無し (松吹く風の音は古も今もかわりはない。・黄任)

古 松
今 聲
無

佐藤象雲書

第一画と「口」が間延びしないように。

第一画の起筆の位置は左払いの起筆より下げる

第二画の起筆の位置は左払いの起筆より下げる

どしりと安定させる

第一画と「口」が間延びしないように。

左右対向させる

繁画で大きくなり易い字。鋒先を利かせて細線で歯切れよく。

弱くならないよう。

文科省学習指導要領の筆順とは異なり、伝統的筆順。

烈火は縦画の脚部に即するように。



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。



次号課題

隸書



幽竹人の如く静か

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
<p>涼しさを絵にうつしけり</p>		
<p>嵯峨の竹</p>		

松尾芭蕉の句

和泉溪石先生書

弔民伐罪周發殷湯
 弔民伐罪周發殷湯
 弔民伐罪周發殷湯

佐藤象雲書

音

チヨウミンバツサイ
 シユウハツイントウ

略解

暴虐な君を伐ち、人民を苦しみより救う。
 周の武王は殷の暴君紂王を、殷の湯王は夏の桀王を滅ぼした。



邪を蕩^{のぞ}き正に返す、(爵)を奉じ……

■ 史^し晨^{しん}後^{こう}碑^ひ

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (12)

象雲臨

『蕩邪反正奉』

書論集で、隸書の書き方を端的に述べている文がありますのでここにその一部を紹介いたします。

方勁古拙 亀の如し鼈の如し

「隸書には必ず角ばっていて力強く古拙(古びた趣があり技巧を露わにしない)の韻致が備わっているべきで、軟弱で上滑りであってはならない。同時に、字形は亀やスッポンのように大体扁平に作るべきであるが、ただ扁平というの是一般について言っていて、方形の中に扁平を帯びたものもあり、扁平と方形とは結構と章法を見て相互に交わり合わせるべきであり、そうすることによって型にはまったものにならないにすむ。」(馬国権・隸書と隸法)

この文はまだ先がありますが、この史晨後碑の書法を説明の要諦を集約している文です。続きはまた、本欄で紹介したいと思います。

觀
宇
宙

宇宙（之大を仰ぎ） 觀る

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（14）

象雲臨



『觀宇宙』

本欄で紹介している臨書している蘭亭序は、馮承素摹本と称され、卷頭に「神龍」の印の半分ずつが見られるところから「神龍半印本」と呼ばれるものです。これは蘭亭が定武系・真跡系・褚摹系の三つに大別されるなかで、真跡系に属し、秘匿されていたために明代の中期から脚光をあびるようになったと言われています。数ある蘭亭の中で古くから推されています。これは太宗の生前、歐陽詢の臨本が一番真に迫っていたために石に刻させたと伝えられています。一方、本欄の「神龍半印本」は刻本も多く、三希堂法帖にも刻されています。

しかし「神龍半印本」は筆路が明快なため、細部の筆致にとらわれ過ぎるきらいがあり、その分全体の風趣を見失いがちです。逆に定武本などの拓本は、自分で想像を働かせる余地が多分に残されていることから、自分の視点で書かざるを得ず、似せて書くための臨書になりにくく、個性的な臨書作品となる場合が多くなります。どのよう王羲之を学ぶかということは、書を学ぶ者に課せられた命題のようになっていきますが、簡単なようで実は非常に難しい問題です。